

## 2007 年度公開セミナー開催にあたって

日本人による西アジアでの遺跡調査は 1956 年、東京大学のイラク・イラン遺跡調査団によって始まりました。それから半世紀を経た現在、毎年 20 を越える日本の調査隊が西アジア各地で遺跡調査を行い、数多くの世界的な成果を挙げています。この記念すべき東京大学による西アジア遺跡調査 50 周年を機に、『遺丘と女神—メソポタミア原始農村の黎明』展が東京大学総合研究博物館および岡山市立オリエント美術館において順次開催されています。

日本西アジア考古学会と岡山市立オリエント美術館はこの展覧会にちなみ、2007 年度公開セミナー「世界最古の農耕村落の出現—西アジア先史考古学の最前線—」を企画いたしました。イラク・イラン遺跡調査団を率いた故江上波夫教授は、人類史上最初の農耕村落、つまり「原始農村」が出現したことにより、人々の暮らしや社会がどのように変わったのかを当時の西アジアにおける学術調査の研究テーマとして掲げました。その後、日本の西アジア先史考古学の研究は、近年、レヴァント・アナトリア地方を舞台として目覚ましい成果を挙げております。このセミナーでは、西アジア各地で農耕村落の起源や展開を研究されている方々を講師に迎え、最新の研究動向を紹介するものです。

このセミナーをきっかけに、文明社会の基礎を形づくった「原始農村」の世界により深い関心を寄せていただければ幸いです。

主催者

## 目 次

### 2007 年度公開セミナー開催にあたって

#### シリアにおける農村世界の発展

前田 修（東京家政学院大学 非常勤講師） 1

#### トルコにおける初期農耕文化—これは農耕村落なのか？

三宅 裕（筑波大学 准教授） 7

#### ヨルダンの新石器文化の特色を考える

和田 久彦（古代オリエント博物館 共同研究員） 13